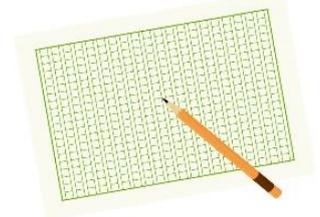


* 情熱のかたち

8月22日(水)、「わたしの主張」村上岩船地区大会が行われました。
学校代表として出場した、大泉茜さんの作文を紹介します。



「私からの手紙」

村上中等教育学校 3年 大泉 茜

私は、本は手紙だと思っています。

「自分の考えを伝える方法」と聞くと、何を思い浮かべるでしょうか。実際に口に出すことはもちろんですが、文字に起こしたり、絵にしたりと、目に見える形にする方法もあるでしょう。時には音楽のように目に見えないものからも、私たちは何かを感じることがあります。このように、私は「伝えたいこと」は様々な形で私たちを取り巻いていると考えています。そして本も、手紙も、その形の一つなのです。

手紙には、書いた人からあなたへ、その人の思いが綴られています。それは本も同じです。本には、作者から読者へのメッセージが込められています。読者というと不特定多数のイメージがあるかもしれませんが、それはその本を手にとった私達、もっといえば、あなたに向けてのメッセージです。本の表紙は、あなたのことを思いながら選んだ「封筒」。本のページ一枚一枚は、「便箋」だと考えることができますでしょう。

私がこう考えるようになったのは、ある人がきっかけでした。その人は、今年の二月に、私に手紙と文庫本を送ってくれた人です。受け取った本の物語は、目標を見失っていた男子高校生が、絵本作家になりたいという転校生に出会い、絵本を通して変わっていくというものでした。私には、この転校生と同じように、絵本を作りたいという夢がありました。ですが、その時の私は、すっかり目標を見失っていました。長い間書き続けていた文章も、少しの間熱心になっていた絵を描くことも、当時は全くしていませんでした。この本の主人公が変わっていくと同時に、私の中にもある思いが芽生えました。「私も、変わらなければ。」そんな思いに駆られ、本を読み終わるとすぐ、筆をとったことを覚えています。まるで、私に向けた手紙を受け取ったかのように。

実は、その本を書いたのは、私に手紙を出してくれた人自身なのです。発行されるよりも早く私のもとへ届いた本は、私の背中を強く強く押しつけて

れました。この本は、誰かに宛てた手紙なんだ。そして私もその誰かのうちの一人となっていたことに、その時初めて気付いたのです。そう考えると、不思議と私の考え方が、少しずつ広がっていきました。「誰かに宛てた手紙」は、本だけとは限りません。何かを伝えるということに、決まった形である必要はないのです。音楽や、誰かの行動ひとつでさえ、私たちの身の回りにある、心を動かすものすべてが、「誰かに宛てた手紙」だと考えることができるのではないのでしょうか。

私は、手紙が届いたら、相手に返事をする必要があると思っています。返事をすると言っても、実際に手紙を送るというわけではありません。私はこの本を読んで以来、再び絵や文章をかくようになりました。自分のためというのももちろんですが、そうすることで作者からの「手紙」に応えられるのではないかと考えたからです。思いを伝えることに決まった形がなくいいのと同じように、受け取った思いを返すのにも、私なりの形があっていいのです。

私は、相手の伝えたいことを見つけ、そのメッセージに応えることのできる人になりたいです。まずは周りから様々な形の「伝えたいこと」を見つけ出し、その意図を掴む。それに対し、自分らしいアクションを起こすことで応える。あたりまえのことかもしれませんが、とても難しいことでもあります。ですがそれと同時に、たくさんの人の考え方を受け止めていくことで、自分の世界が広がっていくことの楽しさにも気付くことができるでしょう。そして「誰かが伝えたいこと」を集めた先に、「自分自身の伝えたいこと」を自分なりの形で届けようとする、新しい自分にきっと出会えると私は信じています。そして私はいつか、本を手にした人の背中をそっと押すような、そんな物語を紡ぐ絵本作家になりたいです。

私は、これからも、かき続けます。私からの手紙が、たくさんの人の心に届く日まで。

＊発表者 大泉茜さんのコメント＊

今回、「わたしの主張」として発表する機会をいただけてよかったと思っています。ずっと書きたいと思っていたので、出場が決まってから、先生にアドバイスをもらったり、練習に付き合ってもらったりして、伝えたいことをより分かりやすくできたことを本当にありがたく感じました。

発表直前に読み方を変えたことが良かったのか悪かったのかは分かりません。県大会に進めなかったことは悔しいですが、あれがその時の私の「伝えたいこと」の形だったのだと思うので、それはそれで良かったのではないかなとも思っています。これからもたくさん、かき続けます。

学級発表会の際にも、作文もさることながら、発表の仕方が素晴らしく、聴衆を引き付けていた茜さん。本番を迎えるまで、私たちの想像を超える練習を重ねてきました。本番の発表は、第一声で会場の空気を一気に引き締め、ことばのひとつひとつを丁寧に届けようとする、茜さんの魅力が詰まったものとなりました。発表後の拍手とともに、近くにいた観客の方から聞こえてきた「…この子、すっごいね！」というつぶやきが、自分のことのように嬉しかったです。

そして、猛暑日続きのこの夏休み中、特別棟3階で情熱を燃やしていた箏曲部の皆さんの発表です。こちら、とっても素晴らしい発表でした！

＊箏曲部 樋木みなみさんのコメント＊

私たちは、8月22日の主張大会のアトラクションで、3曲演奏してきました。いつもの発表は1曲だけですが、3曲だったので、練習が大変でした。当日は、拍手をたくさんもらったので、良かったです。次の発表も頑張りたいです。



今回私が改めて感じたのは、「情熱のかたちというのは、いろいろなものがあるんだなあ…」ということです。この日の主張の発表や、箏曲部の演奏には、例えば六煌祭の応援のような派手さはありません。でも、芯の強さが感じられる凛とした姿や、内にある熱いエネルギーは、観客一人一人の心に届き、大きな感動を与えていたのです。私たちはとすると、派手さや元気さ、あるいは分かりやすい成果に目を奪われ、その時見えるものの奥にあることに思いを巡らせるのを、忘れがちになります。でも、情熱のかたちは、一人一人みんな違うもの。その人の輝きをきちんと見ようとする姿勢を、これからも忘れないようにしようと思えた1日でした。



新潟県立村上中等教育学校

TEL 0254-52-5115

FAX 0254-53-6773

学校ホームページ URL

<http://www.murakami-ss.nein.ed.jp/>

電車不通時の連絡

mrk-ss.16@murakami-ss.nein.ed.jp